

教育開発支援 NEWS LETTER

November 2018
No.
37

平成30年度 大学生基礎力レポートI(1年次)およびII(2・3年次)の結果について……………01～09

教育開発支援委員会

平成29年度 卒業生アンケートの結果について……………10

教育開発支援委員会

平成30年度 大学生基礎力レポート I (1年次) および II (2・3年次)の結果について

教育開発支援委員会

I 実施状況

平成27年度に開始して4回目の実施となり、今年度から法学部でも実施したことで、一部(昼間部)全学部での実施となった。

学 年	種 別	実施日	受検者数	受検率
1年次	大学生基礎力レポートI	4月3日(火)	3,953	99.0%
2年次	大学生基礎力レポートII	3月31日(土)	3,593	85.4%
3年次		3月30日(金)	2,871	65.3%

II 分析のポイント

2019年度と2020年度に計画されている新学部・学科の設置、商学部の神田キャンパス移転、既存の学部・学科におけるカリキュラム改正など、本学では、大規模な改革の実行を目前に控えている。これらの改革によって、本学が教育の質をより高めていくためには、現状を適切に把握し、そのうえで新たな施策に結び付けていくことが重要であると考え、以下の項目について報告書を作成した。

1. 卒業認定・学位授与の方針の検証
2. 学修成果の検証
3. キャンパスおよび学部間の回答傾向の比較

III 分析結果

1. 卒業認定・学位授与の方針の検証

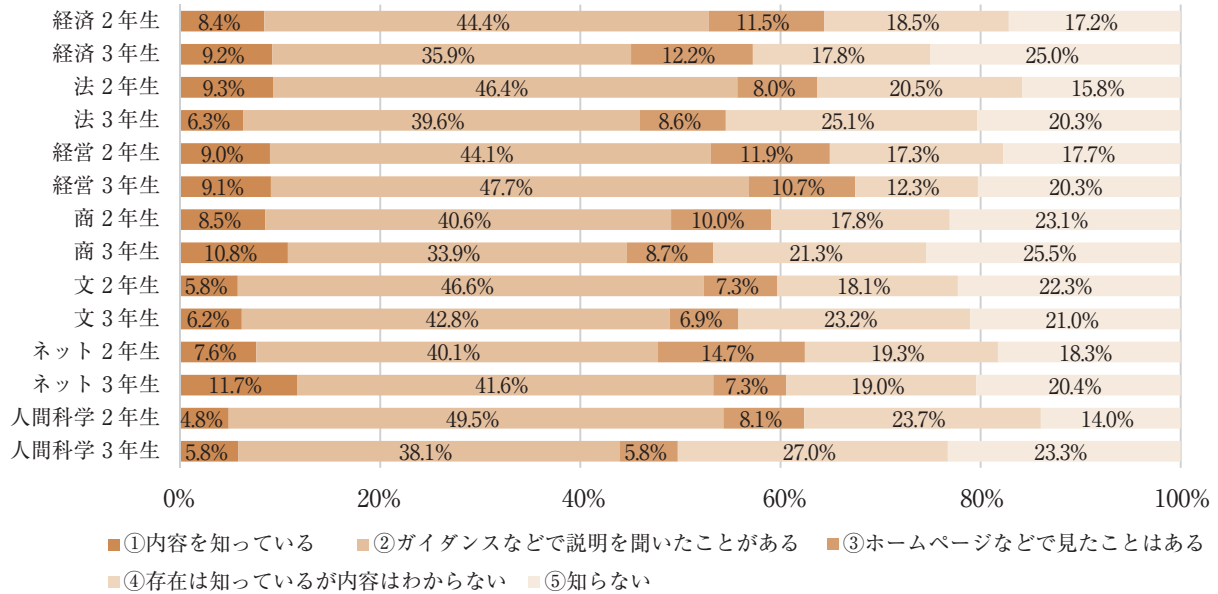
(1) 卒業認定・学位授与の方針に関連する設問の回答状況

本学では、学士課程全体の卒業認定・学位授与の方針(以下、「DP」という)において、次の4つの項目を身につけなければならない資質・能力として掲げ、各学部・学科では、これを踏まえてそれぞれのDPを策定している。

- [DP1] 社会知性の核となる、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法を身につけ、活用することができる。(知識・理解)
- [DP2] 社会知性の意義を理解し、人間理解、倫理観、地球的視野を身につけ、社会生活上の諸課題に取り組み、その能力を生涯にわたって開発し続けることができる。(関心・意欲・態度)
- [DP3] 論理的思考力、コミュニケーション能力、情報リテラシーを身につけ、それを活用して情報の収集・分析・発信を行うことができる。(技能・表現、思考・判断)
- [DP4] 大学における学修で身につけた知識・技能を活用し、創造的かつ主体的に社会の諸課題に取り組むことができる。(思考・判断)

以下にDPに関連する質問項目の集計結果を示すが、①②⑤⑥の設問はDPの検証に活用する目的で本学が独自に設定したものであり、それ以外は大学生基礎力レポートIIに設定されているものとなる(対象はいずれも2・3年次)。

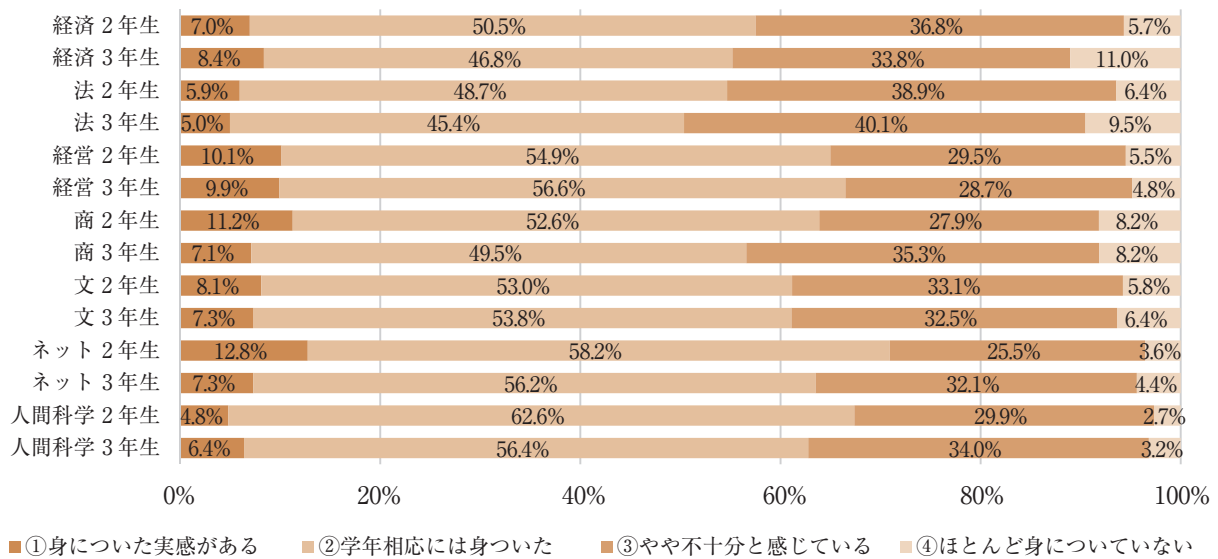
①大学が定めている「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」および「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」を知っていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。【大学独自設問】



学部によって多少の違いはあるものの、「内容を知っている」を選択した学生がほとんどの学部・学年で10%以下であり、履修ガイダンスの直後に大学生基礎力レポートを実施していることを考慮すると、全般的に認知度は低く、

学生に浸透しているとはいえない状況と考えられる。
また、文学部を除いて2年次よりも3年次の方が「知らない」の選択率が高い点については、望ましい状態とはいえ、学生への周知方法については工夫が必要である。

②大学におけるこれまでの学修を通して、所属する学部・学科の専門的な知識や技能、思考方法について、あなた自身どの程度身についたと感じていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。【DP1関連・大学独自設問】



この設問からDP1との関連を見ると、全学部の2年次および3年次で肯定回答の割合が50%を超えており、半数以上の学生が、本人の感覚としては、所属する学部・学科の専門的な知識や技能、思考方法が、ある程度身についたという実感を持っているようである。多くの学部で2

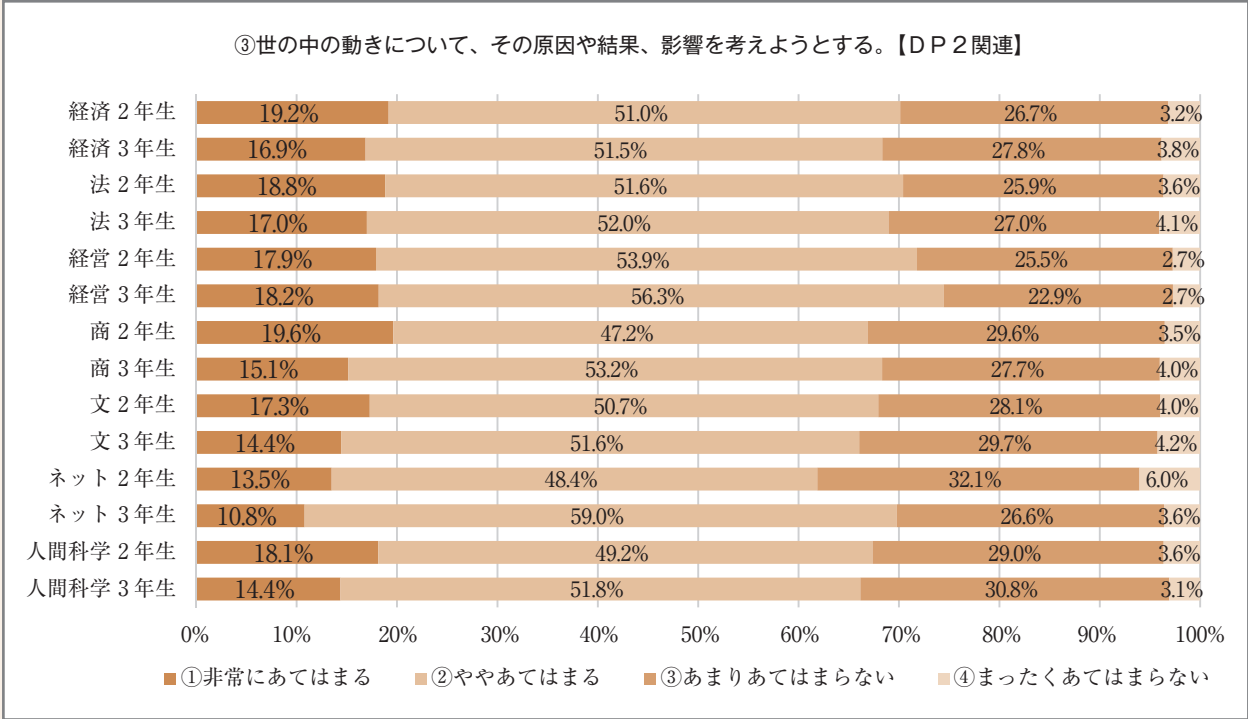
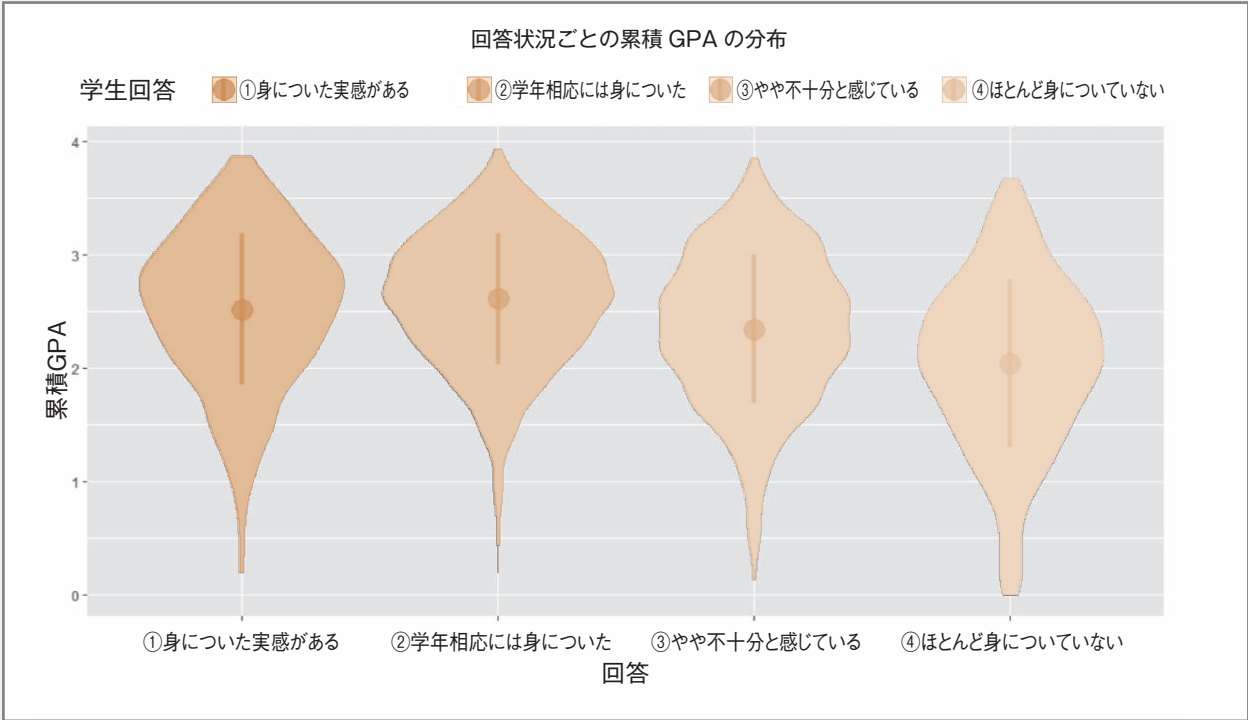
年次よりも3年次の肯定回答率が低いことは、学年進行によって授業の難易度が上がっていることが原因であるなら、その意味では、教育課程の編成が順次性を意識したものになっていると説明することもできそうである。

平成30年度 大学生基礎力レポート I (1年次) および II (2・3年次) の結果について

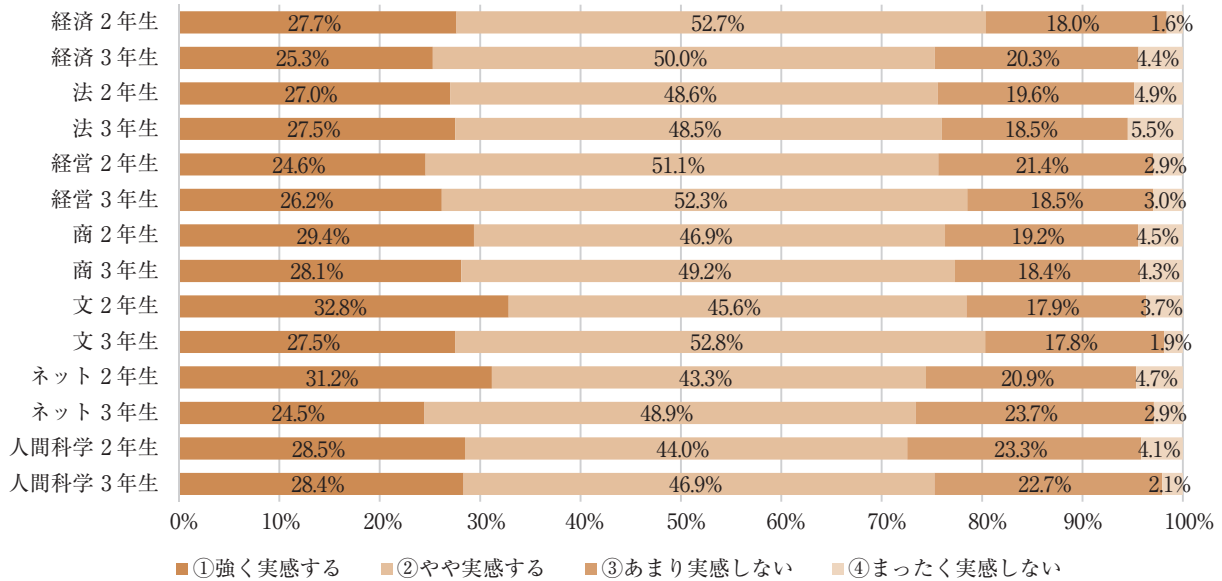
下のグラフは、この設問における回答状況ごとの累積 GPA の分布を表したものである。全体として肯定回答をしている学生の方が、累積 GPA の平均値が高い印象を受ける。

また、回答群ごとの GPA に有意な差があるかを確認するために、回答群ごとの累積 GPA を多重比較検定したところ、回答①と回答②を選択した群の間には有意な差がな

かったものの、その他の各群間には有意な差がみられた。したがって、累積 GPA の高い学生、すなわち大学での学修に対して真面目に取り組み、良い成績評価を修めている学生ほど、専門分野の知識・技能が身についたと感じていることを示唆している。



④学び続ける大切さを知った。【DP2関連】



大学生基礎力レポートⅡに設定されている設問のうち、DP2で示す内容に近いものとして、③④の設問を取り上げた。

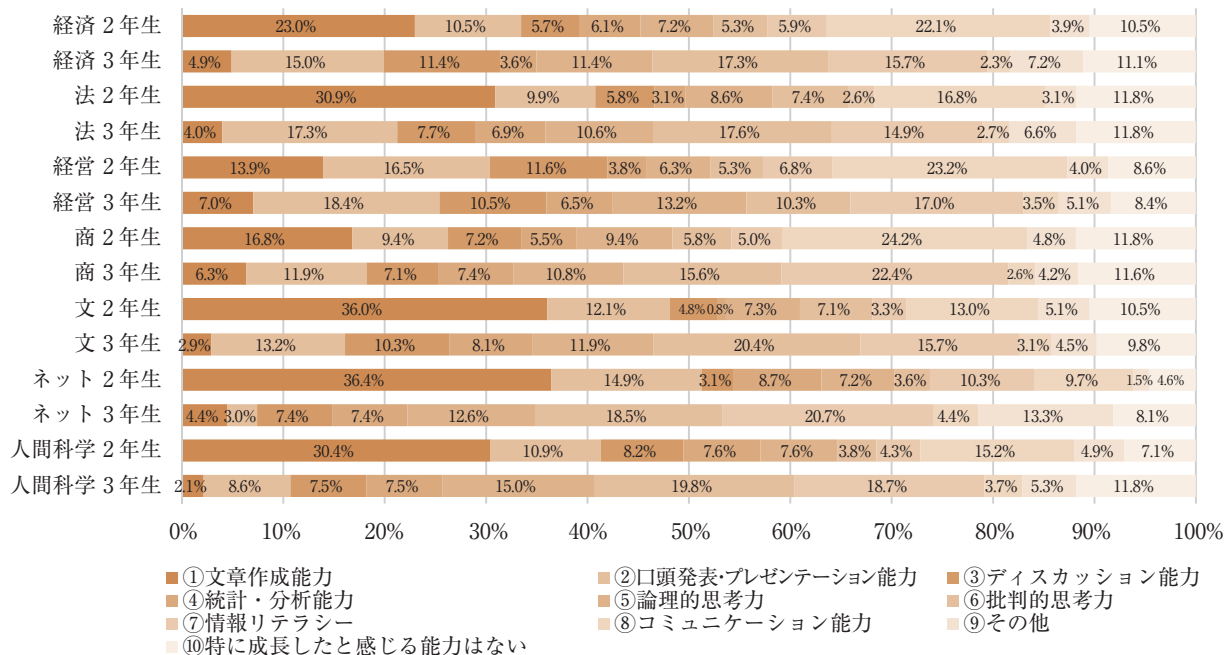
③の設問については、学部・学年での差はそれほどなく、すべての学部で肯定回答が60%を超える結果であったが、「社会知性の開発」という観点では、やや物足りない結果であった。

④の設問については、すべての学部・学科で肯定回答が70%を超えており、比較的望ましい状況であると考えられる。

DP2に関連する設問として取り上げた③と④の結果については、いずれも肯定回答の割合が高く、学生の意識は前向きであることが見て取れる。学生自身は、DP2を意識して回答したわけではないだろうが、今後、DPの内容を学生に浸透させることができれば、学生の意識がより高まる可能性を感じる結果であった。

⑤あなたがこの1年間で成長したと感じる能力について、最もあてはまるものを1つ選んでください。

【DP3関連・大学独自設問】



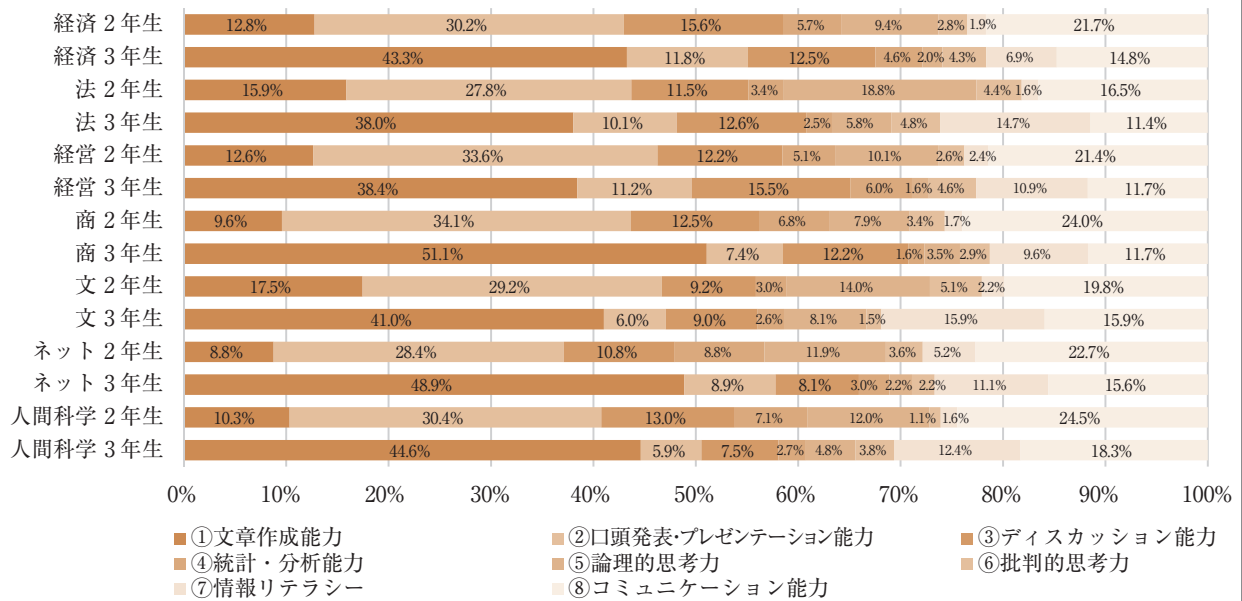
平成30年度 大学生基礎力レポートⅠ（1年次）およびⅡ（2・3年次）の結果について

全体的な傾向として、2年次の回答（1年次の学修を終えた段階）で成長したと感じているのは、「文章作成能力」「コミュニケーション能力」である。「文章作成能力」については、専修大学入門ゼミナールに加え、専門入門ゼミナールを設置する学科を含む学部で成長実感がより高いことも特徴的である。

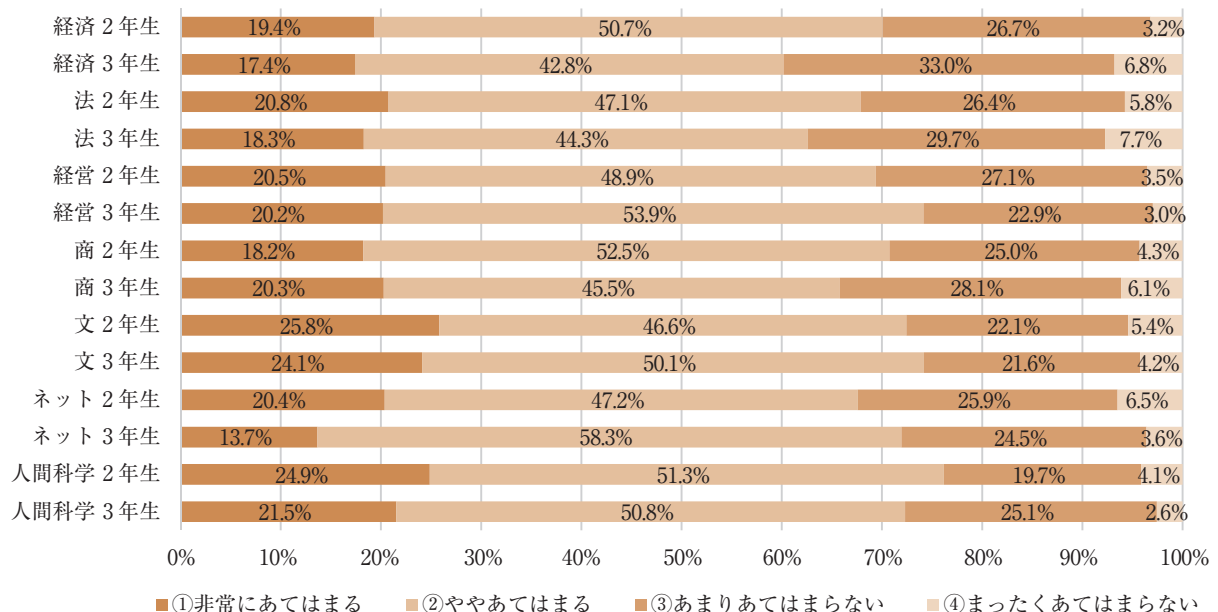
3年次の回答では、「批判的思考力」と「情報リテラシー」について成長したと感じており、それに加え、「論理的思考力」の選択率についても、すべての学部で2年次より高い結果となった。

したがって、DP3で身につけることを求めている能力の「論理的思考力」「コミュニケーション能力」「情報リテラシー」については、よい傾向を示していると考えられる。

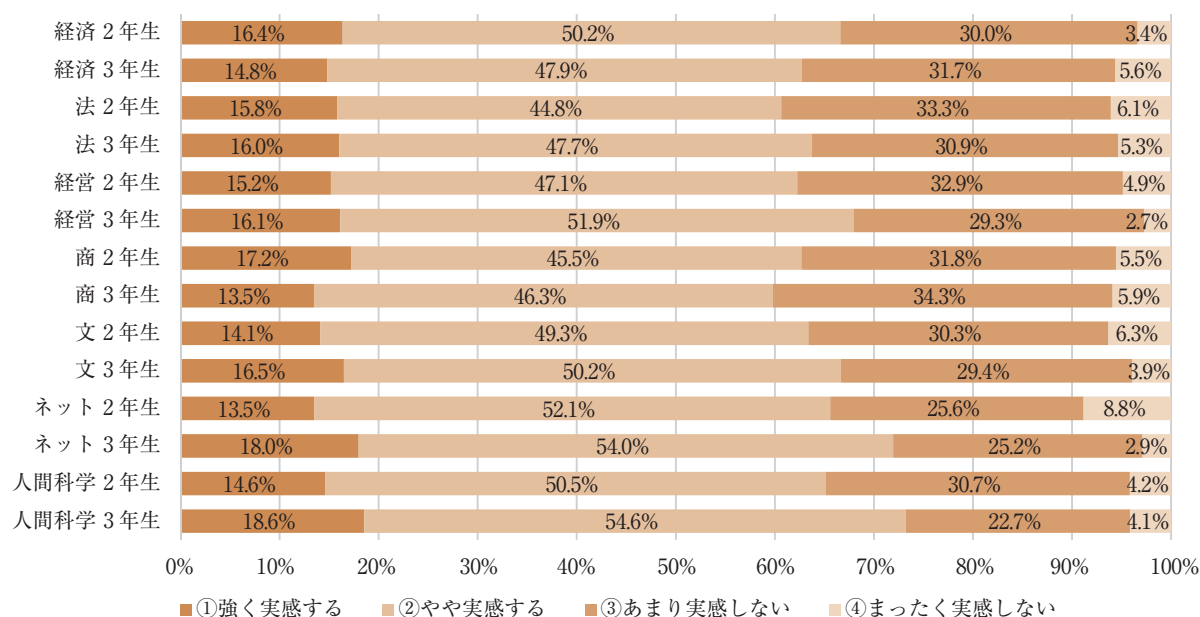
⑥あなたが今後1年間で伸ばしていきたい能力について、最もあてはまるものを1つ選んでください。
【DP3関連・大学独自設問】



⑦「正解」のない課題であっても、前向きに取り組もうとする。【DP4関連】



⑧問題に直面したとき、なぜそうなるのか原因を深く考えるようになった。【DP4関連】



⑥の設問は、⑤と同様の選択肢で、今後1年間で伸ばしたい能力を尋ねている。特徴的なのは、すべての学部で2年次が「口頭発表・プレゼンテーション能力」の選択率がもっとも高く、すべての学部の3年次が「文章作成能力」の選択率がもっとも高いところである。2年次が1年次で身についたと感じた「文章作成能力」について、3年次で伸ばしていきたいと感じている点については、2年次において「文章作成能力」の不足を感じた結果であると推測されるが、教育課程編成上の配慮が必要であるか否かについて、今後検討の余地があるものと考えられる。

大学生基礎力レポートⅡに設定されているものから、DP4で示す内容に近いものとして、⑦⑧の設問を取り上げた。両設問とも、すべての学部で肯定回答が否定回答の割合を上回る結果であった。しかしながら、2年次より3年次の肯定回答選択率が下がっている学部が、⑦で4学部、⑧で2学部という結果であり、DP4で求める資質・能力を高めていくためには、こうした点についての要因を探ることも必要であると考えられる。

(2) 卒業認定・学位授与の方針に関する現状と課題

これらの設問は、いずれも学生の主観による回答であり、DPの達成状況を客観的に測定できるものではないが、学生の認識とDPが求める資質・能力とにおける乖離の有無を確認し、適切性を検証することには一定の意味があると考えられる。回答の状況を見る限り、大学が設定しているDPは、本学学生にとって不相応なものではないと考えられる。各学部・学科のDPは、学士課程全体のDPをさらに具体化したものである。それぞれのDPを同様の観点で検証してみることは、間近に控えた改革をより実質的なものにするためにも必要であろう。

そして今後、DPの検証をより実質的なものとするためには、カリキュラム・マップを用いて各学部・学科のDPと各授業科目との対応を量的に把握し、大学生基礎力レポートから得られたデータを掛け合わせることが必要であると考えられ、それによってDPの達成状況が見えやすくなるものと思われる。

一方で、学生にDPの内容が浸透していない点については、改善が必要である。DPは、学生の学修成果の目標となるものでもあることから、学生の認知度を高める工夫が、今後必要になると考えられる。

なお、ここでは学士課程全体のDPと大学生基礎力レポートの設問との関連を述べたが、各学部・学科で定めるDPは、教育課程編成・実施の方針に記載する「学修成果の評価方法」の内容と対応するよう策定されており、それらに基づく検証も、各機関において検討することが望まれる。

2. 学修成果の検証

(1) 本学の学士課程教育について

現行の学士課程教育は、2014年度入学者を対象に「新たな学士課程教育」としてすべての学部で導入されたカリキュラムであり、今年度で5年目を迎えている。そうした中、今般の学部・学科新設、商学部の神田キャンパス移転の計画に加えて、既存の学部・学科においても、2019年度には経営学部、文学部、ネットワーク情報学部、人間科学部で、2020年度には経済学部、法学部、商学部でカリキュラム改正を行う予定となっている。

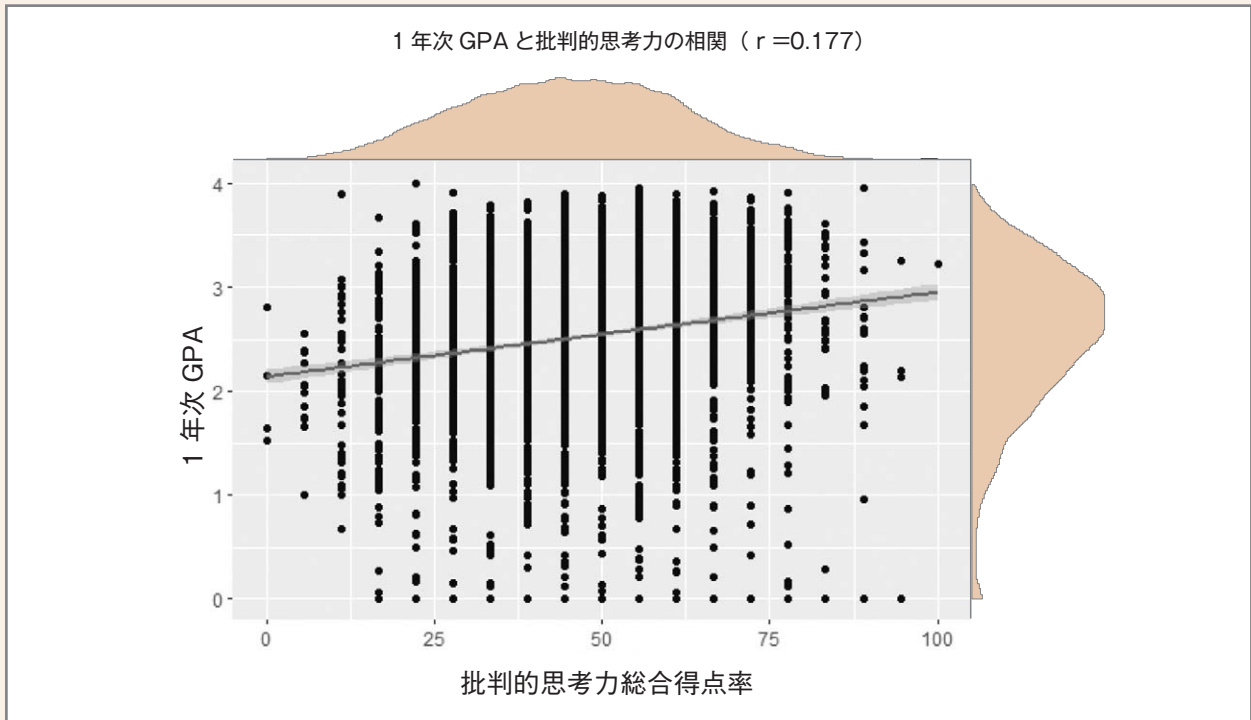
本委員会では、こうした状況を踏まえ、大学生基礎力レポートの結果と学生の学業成績等を用いて、以下の分析を行った。

平成30年度 大学生基礎力レポート I (1年次) および II (2・3年次) の結果について

(2) 批判的思考力の正答率と学業成績 (GPA) との関係

下のグラフは、大学生基礎力レポートに設定されている「批判的思考力」を測定するための設問の正答率 (2年次) と、1年次における GPA との関係を示したものである。

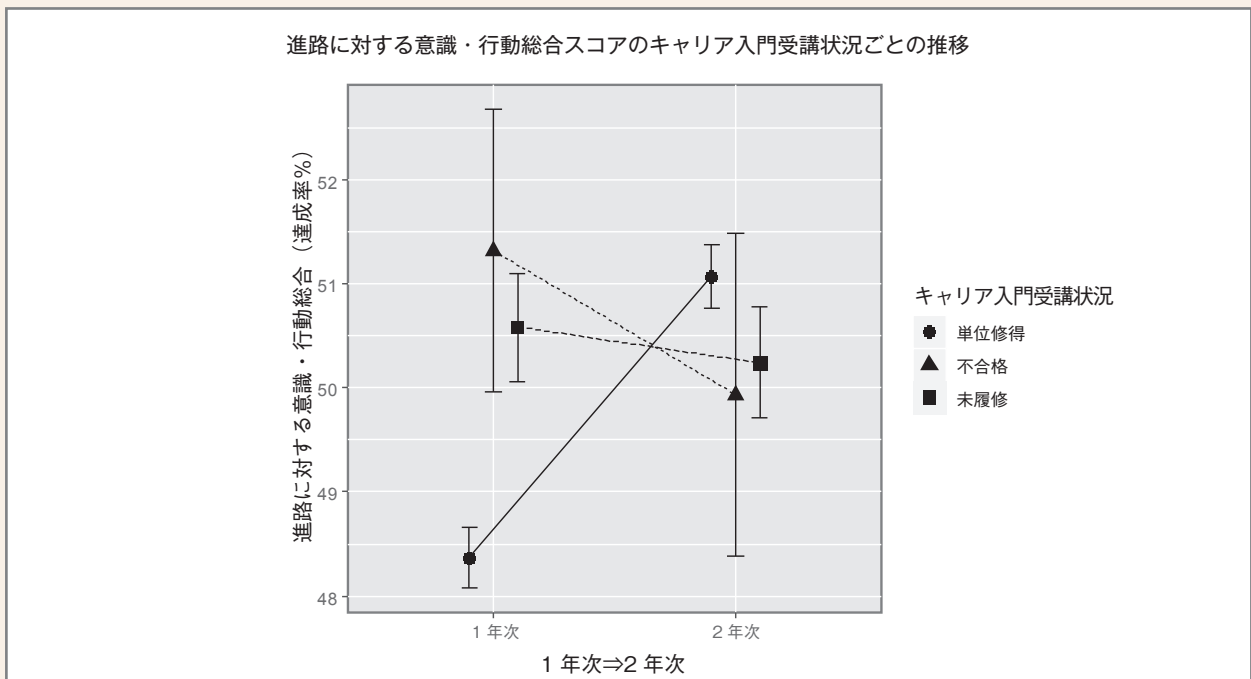
これらの変数間の相関係数は $r = 0.177$ ($n = 3402$) であり、相関がないとは言えない ($p < 0.001$) もの、GPA の高い学生は批判的思考力の正答率が高いという正の相関関係は非常に弱いと言える。



(3) キャリア入門の効果について

大学生基礎力レポートに設定されている協調的問題解決力の「進路に対する意識・行動総合」の達成率について、1年次におけるキャリア入門受講が与えた影響を見たものとなる。

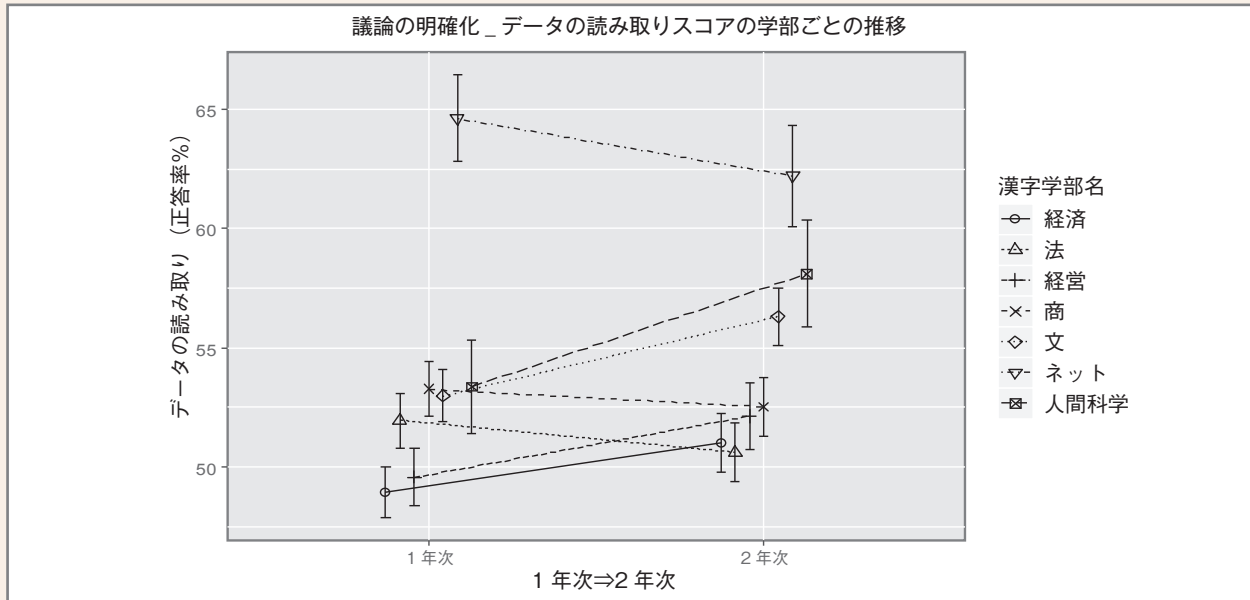
入学時の達成率は、1年次におけるキャリア入門の不合格者が高くと高く、次いで未履修者、単位修得者となっている。1年後の2年次には、キャリア入門の単位修得者、未履修者、不合格者の順に逆転しており、キャリア入門が学生に一定の成果を与えている可能性がうかがえる。



(4) データの読み取りスコア

次に大学生基礎力レポートのデータの読み取りスコア（達成率％）の推移を学部ごとに示す。1年次はネットワーク情報学部の正答率が他の学部比べて非常に高いが、2年次になると文学部や人間科学部の正答率が大きく

上昇し、その差は小さくなっている。このように学部間比較をすることで、各学部において初年次に実施している数量的な能力を涵養するカリキュラム（科目）が、目論みどおり機能しているか否かを確認する上では有効であろう。



3. キャンパスおよび学部間の回答傾向の比較

今年度から法学部の参加が得られたことにより、神田キャンパスに通学する学生の意識を確認できることとなった。下の①から④の表は、本学について学生がよいと思っ

ている点を18の選択肢から上位二つを選択する設問において、キャンパス環境を尋ねる選択肢を取り上げ、神田・生田間の比較をしたものとなる。

① キャンパスの立地や周辺の環境がよい（1位・2位選択率）

学年	神田	生田						
	法	全体	経済	経営	商	文	ネット	人間
1年次	18.5	2.4	1.9	2.3	2.6	3.1	1.6	3.1
2年次	29.5	1.7	1.7	2.1	1.3	2.6	0.9	1.6
3年次	34.9	1.2	2.3	0.5	2.3	1.3	0.0	0.5
全体	27.6	1.8	2.0	1.6	2.1	2.3	0.8	1.7

② キャンパス・学生の雰囲気がいよい（1位・2位選択率）

学年	神田	生田						
	法	全体	経済	経営	商	文	ネット	人間
1年次	4.2	11.2	11.7	14.0	10.4	11.6	8.2	11.3
2年次	7.3	10.8	11.2	12.1	9.7	12.1	6.9	13.0
3年次	5.4	9.7	10.3	9.4	10.3	11.1	6.2	10.8
全体	5.6	10.6	11.1	11.8	10.1	11.6	7.1	11.7

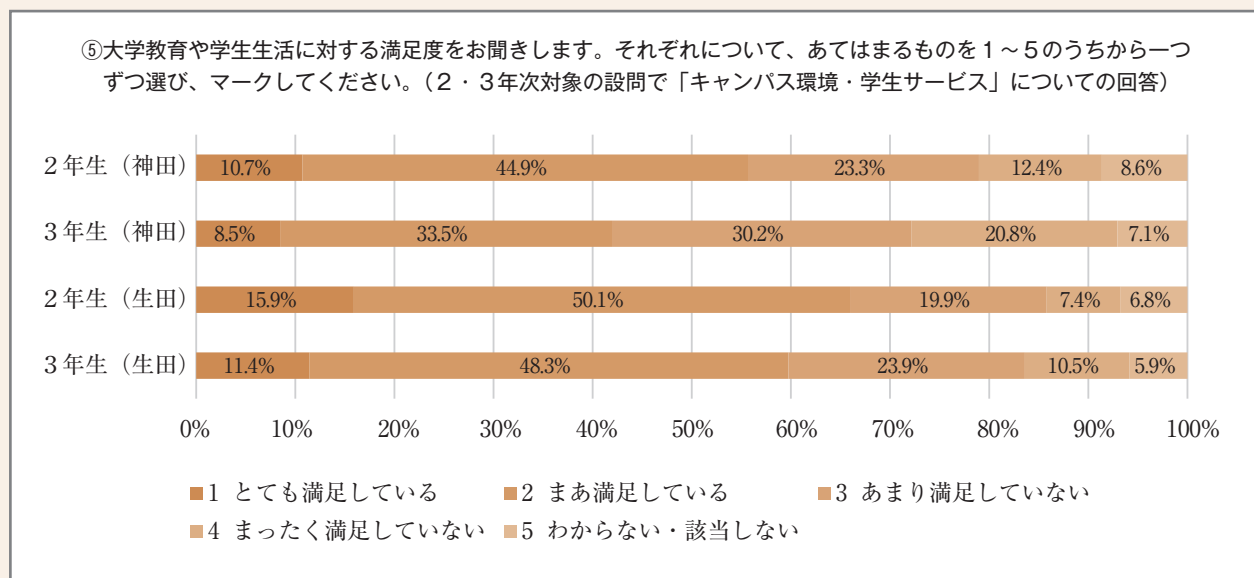
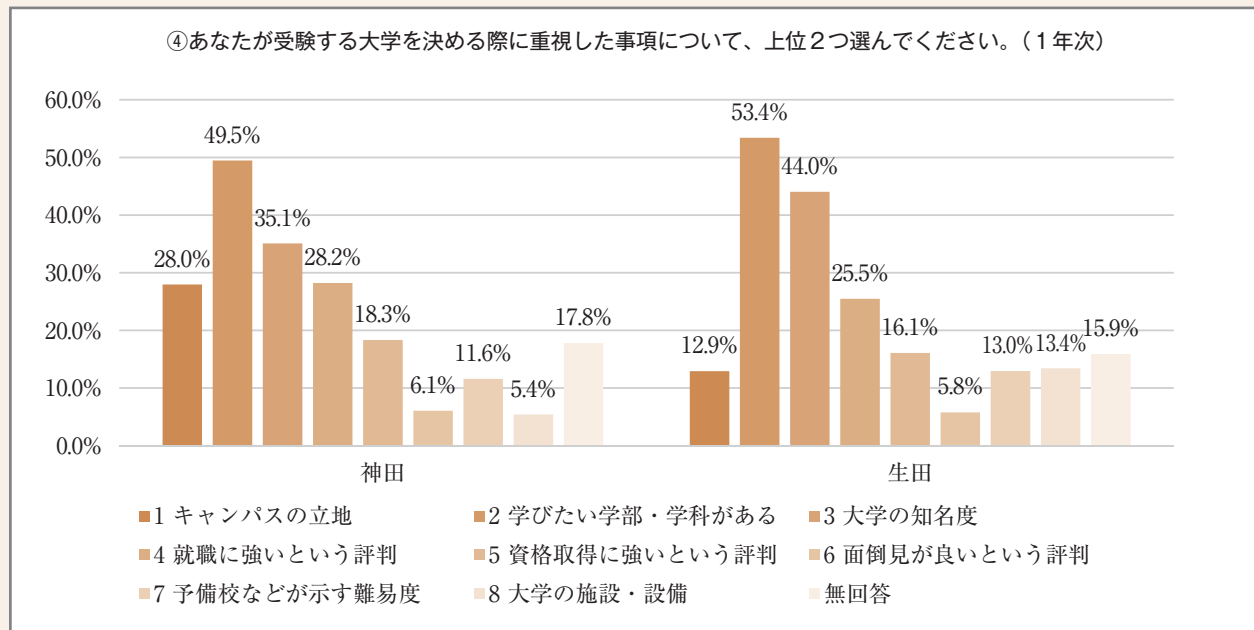
③ 施設・設備が充実している（1位・2位選択率）

学年	神田	生田						
	法	全体	経済	経営	商	文	ネット	人間
1年次	2.0	6.5	7.6	8.1	6.0	5.8	5.7	5.6
2年次	1.6	9.8	9.6	9.4	8.2	11.6	7.4	12.4
3年次	1.0	10.6	9.5	10.8	8.7	9.9	13.1	11.3
全体	1.5	9.0	8.9	9.4	7.6	9.1	8.7	9.8

①の「キャンパスの立地・周辺の環境がよい」について、神田の選択率が生田を大きく上回っていることは、データによらずとも想像に難くないところであろう。神田校舎の立地は、1年次18.5%、2年次29.5%、3年次34.9%と学年が上がるにつれて選択率も上昇していることから、実際に通学することで、学生自身がその立地の良さを実感している様子が見えてくる。しかしながら、「キャンパ

ス・学生の雰囲気がよい」「施設・設備が充実している」の選択率では、神田は生田の選択率を下回っており、キャンパスそのものに対する学生の満足度は低いという結果であった。

続けて、「受験する大学を決める際に重視した事項」「キャンパス環境・学生サービス」について、神田・生田の回答を比較する。



④「受験する大学を決める際に重視した事項」について、神田と生田とで回答の傾向が異なっているのは「キャンパスの立地」と「大学の施設・設備」であり、神田の学生は生田の学生よりも立地を重視し（神田：28.0%、生田：12.9%）、施設・設備はその逆であった（神田：

5.4%、生田：13.4%）。また、⑤「大学教育や学生生活に対する満足度」について、各年次で神田キャンパスの学生の肯定回答が生田キャンパスの学生の肯定回答よりも少ないことから、キャンパス環境整備と学生サービスの拡充が必要だと思われる。

平成 29 年度

卒業生アンケートの結果について

教育開発支援委員会

I 実施状況

卒業生アンケートは、すべての学部・学科の卒業生を対象に、卒業式・学位記授与式の会場において実施した。3ヵ年の実施状況は次のとおりとなる。

年度	卒業生数	有効回答数	有効回答率
平成27年度	4,128	3,575	86.8%
平成28年度	4,197	3,577	85.2%
平成29年度	4,152	3,249	78.3%

II アンケート結果の概要

(1) 卒業生アンケートの因子分析

本アンケートは「1. 卒業後の進路」「2. 専修大学の満足度」「3. 職業観と就職活動」「4. あなたの成長感」「5. 専修大学について」の計5つのパートからなっている。この内、実際の進路を尋ねている「1. 卒業後の進路」を除く、2～5のパートについて、卒業生の回答から特徴を抽出するために探索的因子分析を行った。その結果、14個の潜在因子が抽出された。それぞれの因子のラベルおよび統計量は以下の通りである。

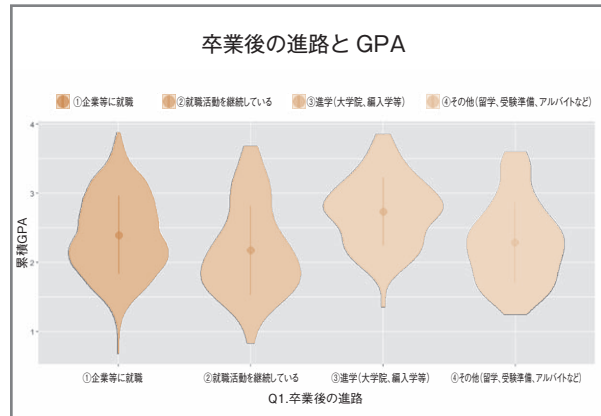
潜在因子とラベル	因子寄与	寄与率	累積寄与率
01. 大学満足度総合	5.24	23.0%	23.0%
02. クラブ・サークル	2.19	10.0%	33.0%
03. 不誠実回答	2.45	11.0%	44.0%
04. ゼミ・卒論	1.55	7.0%	51.0%
05. 友人・コミュニケーション	1.61	7.0%	58.0%
06. アルバイト	1.42	6.0%	64.0%
07. 語学・留学	1.47	6.0%	70.0%
08. 要求特になし	1.18	5.0%	76.0%
09. その他回答	1.04	5.0%	80.0%
10. 卒業後_情報・統計・論理必要	1.03	5.0%	85.0%
11. 資格	0.98	4.0%	89.0%
12. 成長しなかった	0.63	3.0%	92.0%
13. 就職活動	0.89	4.0%	96.0%
14. 教養	0.94	4.0%	100.0%

過去2年のアンケート結果の報告から、全体的な満足度は高いということが分かっているが、因子分析の結果も第一因子に大学満足度を総合的に現す因子が抽出された。

卒業生アンケート各設問の集計結果は、専修大学ポータル「ライブラリ」に掲載しています。ぜひご覧ください。

(2) 卒業後の進路とGPA

(1)での因子分析の際には対象から除いた卒業後の進路について、在学中のGPAとの関係を表したものが下図である。



これを見ると、「3. 進学」を選択した群の GPA が最も高く、ついで「就職」「その他」「就職活動継続」と続いている。これは直感とも符合する結果であり、大学での授業への取り組みやその結果が学生の進路選択にも直結しているといえる。

(3) その他、特記事項

紙面の関係上、すべての潜在因子について説明することは難しいが、ここではいくつか特記すべき事項について、触れておくこととする。

まず、因子間でもっとも強い正の相関があったのは、「04.ゼミ・卒論」と「05.友人・コミュニケーション」である。このことは直感的にも符合するが、ゼミを通じての友人作りやコミュニケーション能力の醸成などが出来ているのではないかと考えられる。逆に言えば、ゼミナールに所属せずに卒業していく学生の中には、この点で不満が残ると考えられる。

また、「10.卒業後_情報・統計・論理必要」という因子に触れておくと、この潜在因子はQ15「就職活動を通して、卒業後に必要になると感じた能力を選んでください」という設問において、「統計分析能力」「情報リテラシー」「論理的思考力」という選択肢に大きな因子負荷がかかっている因子である。裏を返せば卒業生は、これらの能力について現状として社会に出て行く上で不足していると感じているということである。このことは、今後のカリキュラムを検討する上で参考となるだろう。

教育開発支援 NEWSLETTER

専修大学教育開発支援委員会広報誌 第37号 (Vol.19 No.1)

発行日 平成30年11月30日

発行者 専修大学教育開発支援委員会

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

TEL.044-900-7857 FAX.044-900-7856

E-mail fd@acc.senshu-u.ac.jp

編集協力 (株) 芳文社